

● 記念講演



金澤 泰子 かなざわ やすこ

《演 題》

ダウン症の娘と共に生きて

翔子は今年 31 歳になりまして、去年、一人暮らしを始めました。一人暮らしは大変な事です。ダウン症で一人暮らしをした方を、私はまだ聞いた事がありません。翔子も今まで色々な事をしてきましたけれども、今までで一番大きな偉業と言いますか、私にとって一番素晴らしい事をしてくれたのがこの一人暮らしなのです。実は 30 歳になって一人暮らしを始めた理由は、このようにいろんな集会があって皆さんの前で書いたりした時に、翔子が皆さんに「30 になったら一人暮らしをします」と 7～8 年前から宣言をしてしまっていたからなのです。

出産してダウン症と告げられた時から、しなければいけない事は、どうしてもこの子を私が生きている間に一人で自立させなければいけないと思ひ、ずっと自立に向けては厳しくやっておりました。一人暮らしをしないとイケないとは思っていましたが「30 になったら一人暮らしをします」と宣言してききましたので、皆さんから突然「30 になりましたけれども一人暮らしをしましたか?」という質問が沢山来ましたので仕方なくやらせてみました。多分、一週間ぐらいでめちゃくちゃになって家に戻ってくるんじゃないかな?と置いていたし、お部屋探しも大変でした。やはり障害者にお部屋を貸してくれる大家さんはいらっしゃらなくて、随分苦労して探したんです。丁度私たちが 30 年暮らした町の商店街の真ん中にお部屋がありまして、それを苦労して借りて、宣言した以上やらなければいけないと思切って見切り発車みたいなものでやらせ、あれから一年と一ヶ月経ちましたが、翔子は自分の意思で実家に戻って来た事は一度もないです。

毎日一人でご飯を作って食べるというのが翔子の一人暮らしの定義らしくて、仕事で呼んでも必ず家に帰って食事を作って一人で食べる、という生活です。それで、ちょっと翔子は好きな人ができたものですから…(翔子さん「私が好きになったのはインディアサヒ君です!」)

インディアサヒ君ってね、まだランドセル背負っている小学生なのですけど好きでね、その子がいつ来るか分からないという事でお部屋もいつも綺麗ですし、ちゃんとご飯も一人で作って食べてとても料理も上手です。一人暮らしもまさか出来ると思っていなかったのですけれども大成功しています。ただひとつ失敗したのは、太っちゃったんです。なので、今ダイエットを一生懸命しています。それ以外は本当に素晴らしく、この間も翔子のお家を訪ねましたらピンクの可愛い鉢植えのお花を育てていますが、私はいつこんなにもいい子になったのかなと思ひたのですが、素晴らしい生活をしています。皆さんに「ケアする人がいるでしょう?」「アシスタントがいるでしょう?」と聞かれるのですが、本当に誰もなくて一人でやっています。皆さん、出来ないだろう無理だろうと思ひいらっしゃると思ひますし、私も仕方なく出したのですが分かった事は、不安だろうとか出来ないだろうとかいう思ひは親側の勝手な幻想でした。思ひ切って一人で出してみたら立派にやっています、一人暮らししましたらとても頭が良くなっちゃいました。すごい頭が冴えて、今冴えまくっているのです。例えばお金の事なんて私は一生分からないと思ひていました。翔子にはお金の苦労はさせたくないと思ひまして、翔子の父親は早くに亡くなっているのですけれども「翔子のお父様が沢山お前に残していったからお金の事は心配ないよ」と言っていたのですが、一人暮らしを始めて 2ヶ月目ぐらいに私のところにやってきて、「お母様、とりあえずお父様のお金を全部見せて」と来る訳ですね。ですから、いつの間にか、お金の事もおぼろげながら分かってきたのです。おぼろげながら分かれば、いずれこれは実現するのです、翔子の場合。ですからお金の事も分かってきましたし、生活費をどのようにあげようかなと試行錯誤していたのですが、ある日、翔子が「お給料」って言ったのです。今日も帰ったら 5,000 円ね、1回に 5,000 円っていう

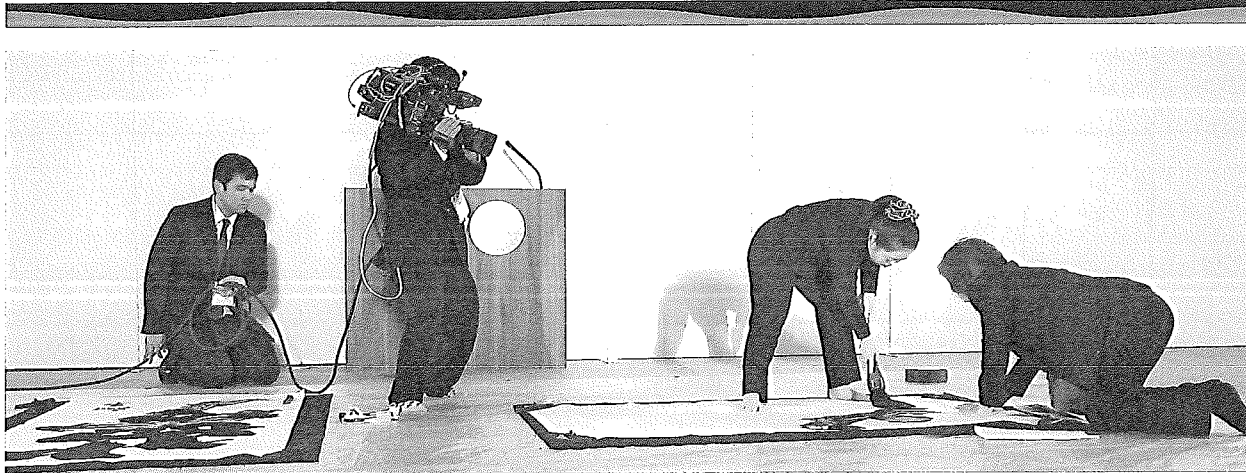
お給料をあげて、上手くいったら千円ずつ足していって失敗したら減俸だっという協定を結んだのです。そういう事で、翔子は今自分のお給料で暮らしています。ですから一人暮らしや自立させる事は皆さん難しいと思ひていますが、やってみたら実に素晴らしい力を発揮しまして、特にダウン症や知的障害と呼ばれる方でもやらせてみたらできる事が沢山あります。親の庇護で出来ないと思ひていた事も出来ちゃいますので、これは素晴らしい事だと思ひて皆に発表して可能性を知ってもらいたいと思ひますので、これからも翔子の一人暮らしを見守っててください。

そしてもう一つ素晴らしい事で、商店街がシャッター街になって滅びてしまいそうな暗い街だったのですが、翔子は大きなスーパーマーケットではお買い物をしていないで、お米は昔からのお米屋さん、お花もお菓子も昔からの全部お爺ちゃまやお婆ちゃまがやっているお店に行き、シャッターを閉めてあげてお手伝いをして、皆さんが翔子を待っていてくれて、お菓子屋さんのお婆ちゃんが「翔子は太陽だ」って言って毎日待っていてくれるし、美味しい珈琲を淹れてくれる 80 過ぎたマスターも「翔子はこの街の誇りだ」と言ってくれていますし、先日、商店街の外れにある交番のお巡りさんに呼び止められて「翔子ちゃんは、この街に降りてきてくれた小さな魔法使いのような気がします。翔子ちゃんの魔法の杖で、この街にキラキラな星を撒いてくれています」と言ってくれたのです。ですから、滅びそうになった街にちょっと光が射しています。地域で育てて地域で自立させていただいて、とても素晴らしい一人暮らしをさせていただいていますので、是非子どもを信じてやらせてみてください。子どもは実は素晴らしい力を持っています。親の壁の方が大きくて私もびっくりしましたけれども、そんな風にして一人暮らし大成功しています。「今日はどんな思ひで書いたの?」(翔子さん「夢とハッピーと感動を、心を込めて書きました。」)

私、30 年前に涙に暮れてダウン症の告知を受けました。そして長い間悲観に暮れていて、ずっと悲しかったのですが時間が助けてくれまして悲しさ苦しさはだんだん薄れてきて、今、私と翔子は大変幸せになりました。健全な子を授かっていたら多分味わえないような素晴らしい境地にきましたので、今日は苦しかった時期からどのように立ち上がって幸せになってきたか、そしてこの幸せがどんなに素晴らしい境地かをお話したいと思ひます。もう一つお話ししたいのは、翔子は大変不思議な子なのです。例えば翔子は超晴れ女です。今まで 700 回～800 回地方で講演をされていて、神社やお寺はほ

とんど外で書くのですが、一度も雨に降られていないです。雨が降っていても書く時には止むのです。翔子から学んだ事は、低気圧や高気圧の具合でお天気が決まるのではないのですね、「気合」で決まる事は私は学びました。大きな雨傘マークが出ていても翔子が行くと止むという不思議な現象が起きているのです。翔子は今日書家としてこちらに来ているので書に関しての不思議をお話しようと思ひますが、翔子の書にはなぜか多くの方が涙を流して感動してくださるんですね。書に涙が流れるという事は不思議です。私も 50 年以上書道をやっていますが、私の書に今まで涙を流してくれた人は一人もいないんですが、翔子の書には本当に多くの方が涙を流して下さる、これが何なのかわからずと考へていました。今ようやく分かるようになったんですが、まずひとつ大きく魂の問題があるんですね。翔子は IQ が大変低いです。2+2=4 が未だに分からないのですが、その代わりに違う知性が大きく育っています。感性と言いますか感受性がとても大きく育ちました。それを皆さんが「魂の書」って言って下さるんで、これを魂と呼ばせて頂きたいのですが魂がどのような物かと言いますと、とても純度が高く純粋に保たれました。知的障害という環境の下に保たれた純度の高い魂で書かれた線が、きっと皆さんを感動させてくれるのだと思ひます。それともう一つ、翔子は実に優しいです。この優しさは私たちが想像出来ない程優しい。これは本当に私が教えられる範疇の優しさではないんです。私の身内にもそんな優しい人はいけませんので私の DNA ではないし、なんだか不思議な優しさなんです。5～6 年前に分かったのですが、実は翔子たちダウン症の方は染色体が一個多いんです、普通の方より。この一個多い染色体の為に、私は長い間、20 年も嘆いたり苦しんだり悲しんだりしてきましたけれども、実はこの一個多い染色体がこの不思議な優しさの正体なんだなって事が分かってきたんです。ダウン症の方は上手く育てば、とても優しいです。いろんな環境の下に変わって来ますけれども、生まれただから 2～3 歳まではとても優しいし、そのまま優しく育った方は本当に優しく、私たちの想像を絶するような優しさを持っているんですね。ですからこの優しい一個多い染色体がもたらした優しさがあるので、翔子の書には優しさが貰えるとか、何か優しい気持ちになれると言ひいただけるんですね。だから、優しさと純度の高い魂と、もう一つ翔子は生きる達人、どんな時でも幸せなんです。本当に、はち切れるような幸せの中で、これは可哀想だと思ひても幸せに変えてしまう。私は書家ですから色々写経をするんですけど、華厳経の中に「唯心偈」と

● 記念講演



「『ただ心が決めるんだよ、この世に起こる事は全部心が作り出すんだよ』と云います。“百字心経”という美しいお経なんですけれども、私は何度もそのお経を書きますが、お経の文面からは真の心が作り出すんだと言う事は良く分かりませんが、翔子と暮らしていると唯心偈の意味が良く分かります。これなんだ、唯心偈の云っている事は、と言う事が分かるんですね。ですから、この唯心偈に則った、唯心偈の哲学で生きているようなものですから、とても幸せに生きていて、純度の高い魂と優しい心と生き方が唯心偈のように心が決めながら本当に豊かに生きていますので、この3つが相まって翔子の書に皆が感動して下さって、私のように何年も練習した書であっても到底翔子の書には敵わない。だから、一緒に親子展をやれとか言われても決して出来ないです。何か次元の違うものを持っているので、この事も今日お話ししていきたいと思えます。

まず、翔子の生い立ちからお話ししたいと思います。翔子は私が42歳の時の子どもです。40歳を過ぎるまで私は子どもがいまませんでしたし、とても良い主人だったので、ずっと幸せいっぱいでした。欲しい物はほとんど手に入れたし、やりたい事もやったし、とても幸せで、41の時にめでたですって言われた時には体がほっと熱くなるほど嬉しかった事を覚えています。今は40代の出産は珍しくありませんが、30年前は珍しい事でした。一番欲しかった子どもが40で手に入るんだと思って、これから生まれてくる私の子どもは日本一級に育てようと思って本当に有頂天でした。意気揚々と出産したんですね。しかし、52日目に、多分歩けないだろう、そして知能のないダウン症だって、主人が告げられたんですね。せっかく授かった子が知的障害って言われる事はとても苦しいです。想像出来ないと思いますけど、とても苦しかったですね。そして、今はそんな事はないと思えますが、30年前はダウン症であるという事を隠して育てていました。隠しますので、どうしても私を愛してくれ

る身内の親だとか兄弟だとか親戚の人たちは、私が多分苦しむだろうと思えました。私がこんなに歳を取っているし、歩けないし知能はない、そして今の医学ではダウン症は治らないんです。本当に苦しい中でどうしようもないんです。神に祈るしかない、奇跡で治してくださいとしか手立てがないんですね。私は神なのか仏なのか分かりませんが祈り続けました。「奇跡を起こしてこの子を治してください」毎日祈っていましたので、やはり祈りだと精神世界に入らざるを得なくて、周りの人との関係も希薄になって、翔子と私は引籠ってお経を書いていました。神様が翔子を治してくれたら、私は今私のもっている全てを投げ打って命と差し替えてでも構なかったですね。奇跡が起きればと、祈って祈って祈るんですが奇跡は起きないんです。未だに翔子はダウン症で私は歳を取るし、歩けなくて知能もなく奇跡も起こらない中で生きていかなければいけないんですね、苦しかったです。

そんな中で私は近くに保育園がありましたので保育園に預かっていただいていたんですね。保育園はとても良かったです、小さいお子さんも沢山いらしたし先生も優しい方がいてとても楽しく通いました。そして小学校の普通学級に入れていただいたんですね。普通学級にいただいた事はとても嬉しかったです。なかなか当時はそんな事はありませんでしたから。でもね、学校に行ってみますと何をやっても翔子は最下位でビリで運動会の100m走なんていうのは大差でゴールするんですね。翔子は嬉しそうにゴールを決めてテープを切っているんですが、先生がもう一度テープを張ってくれて、それをトップだと思いき喜んでテープを切っているんです。翔子はトップもビリも分からないので、そんな事が嬉しくて皆に可愛がってもらっていました。でもね、学校に行ってみますと、教室移動のための渡廊下も渡れないんですね。ですから私は女性の担任の先生に「先生申し訳ありません、こんなに手数のかかる子をお預けしまして」と

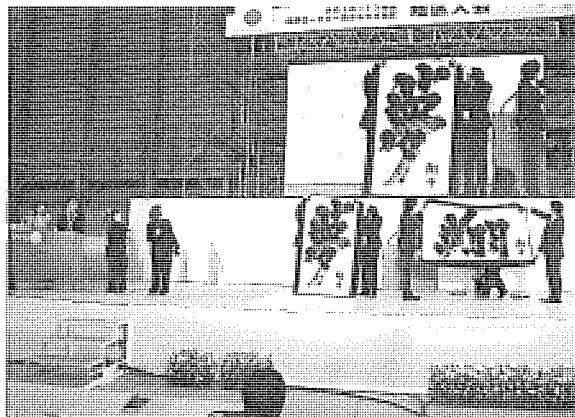
お話をしましたらその女性の先生が「金澤さん、いいのよ」って言ってくださったんです。「翔子ちゃんのいるクラスは穏やかになるし優しい子が増えるから、いてくれていいのよ」って言ってくださったんですね。私、この時初めてです「あ、翔子もいていいんだ」って思ったんです。

翔子は社会的に見たら、生産性も効率性も全くマイナスでしかないし、いちゃいけないと思っていました。二人で死のうとも思っていました。私、日記をつけていたんですが、日記帳の隅に未だに書いてあります、克明に死に方が何通りも書いていました。しかし、どれも実行できないんですね。結局人間は簡単に死ねないという事が分かりました。そして、私は今までいちゃいけない、マイナスしかないと考えていた子に、先生がそう言ってくれて「そっか」と思ったんです。翔子がクラスにいると成績が良くない子とかは落ち着く訳ですよ、ビリがいるし。健全なお子さんは誇りも傷つくし、お母さんやお父さんは許してくれないかもしれないと思うんですが、翔子はビリもトップも分からないから喜んでビリをやるわけですよ。ですので、可愛がってくれてとても上手くきました。私その時、その先生の「いて、いいのよ」という言葉が福音のように思えました。神に祈り倒している時に救われたくて本も色々読みましたけれども、その中に「神はこの世に不要なものを作らない」とあったのですが、この時に「そうなんだ、翔子も不要じゃない」って事をやっと思ひまして、何かお役に立てるんだ、翔子だって不要じゃないんだと思ひましてビリをきちっとやろう、ビリをやれば落ち着く子が出るならばいいじゃないか、と思ってビリをやろうと親が覚悟しましたら、とても楽でした。小さな街なんですけどゆとり教育が始まった時だったので、お仕事をしてお母さん方が土曜日に子どもたちが行き場がなくて困って、私が書道をしていましたので預かってくれなにかと言われたので、思い切って翔子の友達作りに書道教室を始めたんですね。そこに、多くの翔子の小学校の同じクラスの子とか来てくれて、お友達が沢山来て家にも学校にもお友達が溢れていました。翔子はビリをやって、本当に楽しく楽しくしていました。とても幸せな3年間でした。

1、2、3年生、本当に幸せで私も色々な苦勞を忘れていたんですが、4年生の時、すぐに担任の先生に呼ばれて「金澤さん、もう普通学級で翔子ちゃんを預かれない」って言われたんです。この学校には身障者学級とか特殊な学級がないので遠くにある学校に移らなきゃいけないと言われまして、私は身障者学級に行

くので嫌とかではなくて今ここでこんなに上手くいっているのに、やっぱり障害者ってどんなに上手くいってもだめなんだと、非常にやり場もなくショックでした。行っていた学校が近くだったので、やっぱり居させてくださいという事をお話したら、色んな条件をつけられたんですね。私は到底その条件は飲めなかったので学校側と喧嘩になってしまったんですね。そして、私の悪い癖なんですが、次の学校に行かずにボイコットしてしまったんですね。喧嘩をして辞めている訳ですから、友達ももちろん、学校に行っていないし、私も外との交流がなかったのが本当に苦しい思いをしました。孤独になって二人で引籠もって書道をしていたんですが、時間は茫洋とある訳ですよ。学校に行かない訳ですから何もする事が無い。私も専業主婦ですから何もする事がなくて、苦しい中で翔子に私は大きい般若心経の作品をこの機会に作らせようと思った訳です。今書き上げた大きさの半分の半紙に私が毎晩罫線を引いておいて、翔子と朝から晩まで般若心経を書かせました。私がお台所から菜箸を持って来まして、どうして真っ直ぐ書けないのとか馬鹿だねとか、親子ですから優しく教えられないんですね。よそのお子さんには優しく教えますけど、我が子となるとそうとは出来ないんです。朝から晩まで怒っちゃう。翔子はとても良い子でして辞めてとかお母様もうやりたくないとか、マイナーな言葉を今でも決して口にしないんです。ですから黙って泣きながら書くんですね。紙に(涙が)はらはらと落ちるんです。一行書くと乾かす為に休むんですが、その度に翔子は私に「お母様ありがとうございます」って言うんです。私はこの言葉につられてね、般若心経を10組ぐらい、般若心経で272文字です。難しい文字の羅列の272文字ですけれども、朝から晩まで書いて一枚四行ですが、書き終わると翔子が私に温かいミルクティを入れてくれていました。あの味は未だに忘れられませんが、本当に泣きながら、翔子は感受性が強い子ですから母親が苦しんでいるというの分かる子ですからどんなに苦しくても嫌だという事を言わないで、泣きながら書いてくれました。未だに般若心経の本物には涙の跡が化石のように残ってしまっていて、『涙の般若心経』と言われて一番人気があるんですけども、そんな風に泣きながら叱られながら10組ぐらい書きました。お経ですから、きちっとした字で書かせましたので、10組って言うのだいたい3,000字、4年生って10歳です、10歳の子にね3,000字のあの難しい字は過酷な事でしたけれども翔子は、よくついて来てくれて、その時に翔子はいつの間にか、書の基本は出来ていました。そして、持続の力も身につきました

● 記念講演



たし、この時に書家としての力が付きました。私は30年間、翔子を育てていまして感じる事は、闇の中にこそ光があるんだと言う事を感じます。闇に落ち込まなければ、翔子は書家になっていないと思うんです。あの時、どうにもならない中で般若心経を書いた事で、いつの間にか書の基本が身につけて、今、翔子にはどんな字が出てきても翔子は書き順は確かですし、今も私どうなるかなと思ったんですが大丈夫でした。ですので、もしあの時、普通学級にとってもらっていたら今の書家の金澤翔子は生まれてないと思うんですね。あの時、強引に学校を辞めてしまって苦しい中で3,000字書いた事で書家の道が開けましたので、闇も光も同時に起きていると思うんですけど、書道で救われて大きく翔子は成長して来たんですね。

ですから、闇の中に光があるというのは苦しかった時にいつも思っていました。そして、半年くらい学校に行かないで休んでいたんですが、学校に行かない事は許されませんので半年くらい経って障害者学級のある遠い学校に行かれました。遠い学校は良かったです。電車も乗る事を覚えましたし、足も強くなりましたし、寄り道もしたりしながらとても楽しく学校に行っていました。その時私は始めて気が付いたんですが、私は翔子とずっと苦しんで来たと思っていた。翔子はダウン症で苦しかったねと思っていた。いつもお前は可哀想だったね、ダウン症で隠して育てられたし外にも出られないし、お母様と一緒に書道ばかりやらせられてお前は可哀想だった苦しかったね、と思っていたんですが、翔子が喜んで障害者学級に行っている姿を見まして私は間違っていたと思いました。翔子は、ダウン症である事を一度も嘆いてはいないし苦しんでもいないんです。苦しかったのは、親の私なんです。私が自分の思う子ではなかったから、そして世間体もありました当時、将来を不安に思ってやたら苦しんだんですが、翔子はダウン症でOKだったんです。翔子は言語障害があったり数列に

弱かったりしますが、でも違う知性や知能がちゃんと育つんですね。翔子はちっとも苦しんでなかったのに、私と一緒に苦しんできたと思っていたけれども、翔子はそんな事嘆いてなかったんです。ある時、今から5～6年前、ダウン症の事を分かっているのかどうか恐る恐る聞いてみたんです。「翔子ダウン症ってなあに？」と聞いてみたら、翔子が「書道が上手い人の事をいうのかな？」と言うんです。そのくらいにしか思ってなかったんです。それを一緒に苦しんできたと思っていたんですが、ダウン症はちっとも苦しい事ではなかったんです、翔子が正しかった。だんだん成長するにつれて新しい世界が見えてきて私もとても良い生活が送れましたのでね、私がいけなかったんだ、とらわれ過ぎだったなと思いました。そして、中学も高校も身障者学級に行って今の支援学校に進みました。翔子をご覧の通りにとてもし明るい性格を持っていますので身近に色々起きたんですが、とても上手くいきました。先生も翔子ちゃんがいてくれて助かったって言って下さいました。明るくなって、いつも翔子が明るくしてくれて助かりましたよと言っていたんですが、18歳で卒業ですよ、卒業の時にどこかに属さなくちゃいけないんです。知的障害者を一人で抱えるのは大変ですので、社会的に就職をするか学校に行くか、作業所とか色々あるんですが、翔子は当時「仕切り屋翔子」と呼ばれていたんですね、すごく仕切り屋で元気な子でしたので、私は知的障害の方がみんな集まってお給料をもらう作業所が、翔子には良いかなと思って作業所を選んだんですね。とても良い作業所を3つくらい見て選らんだんですが、入所が決まって説明会の日にちょっとした間違いが起きて、実は高校3年生の時の翔子の担任の若い女性の先生が、作業所に渡すべき内申書を父兄に配ってしまったんです。私もその内申書を見ましたら、その内申書に「子育てをする能力のない親」とか「だらしがない」と書いてあったんです。これにはちょっと理由があったんです。翔子が14の時まで遡って話しますと、翔子の父親が翔子と私の目の前で突然心臓発作を起こしまして、そのまま意識が回復しないで亡くなってしまったんです。彼は現役バリバリの52歳でして突然でしたから、親から継いだ貿易の会社をやっていたんです。輸出の会社で当時円のレートがすごく良くて、ものすごい儲かっていた会社を13個もやっていたんです。貿易の輸出ですから海外が多かったんですね。皆さんご存知でしょうけれども、現役社長が突然亡くなると大変ですよ。元気な人ですから突然亡くなるので、何の用意もなかったんですが借金だけ出てくるんですね。保障とか何か色々あって、通帳から毎月



恐ろしい程の利息が引き落とされちゃうんです。私はどうしようもなく、海外の店は私が閉めに行かなきゃいけないだったんですね。国内を充実させるために翔子を置いて私は海外に出なくちゃいけない。そして、運の悪いときは運の悪い事が重なるんですね。主人が亡くなって半年目に私が頼りにして、この子を託していこうと親代わりのように育ててくれていた私の7つ年下のミヨコという妹が末期癌だと言われました。あっけなく亡くなっちゃったんです。翔子は、突然父親は亡くすし頼りにしていた叔母を亡くすし、私はどうしても必要に迫られて海外に出ちゃってどうしようもない中で、翔子がお婆ちゃまって呼んでいる人に託して私は仕事に出ていたんです。そのお婆ちゃまはよくやって下さっていたんですが、忘れ物が多かったらしいんです。これから希望を持って行く作業所にそんな事を言われて、私はもう作業所には行けないと思い「もう結構です、作業所には行かない」と言ってしまったんです。苦しい中でまた引籠もっていたんですが、主人が亡くなるちょっと前に主人の方が、翔子の書の力を認めてくれて私によく「翔子は字が上手いから二十歳になったら個展をしない？」と言っていたんです。ダウン症という事を隠してきていたので、誰に言って誰に言わないか分からなくなっているから、悲観に暮れてやり場のないところで、主人が「二十歳になったら個展をやろう」と言っていた事を思い出したんです。そこで初めて、私は翔子に大きな字を教えて二十歳で20個良い作品を作って、生涯で一度切りだと思って一回だけ派手に銀座で個展をやりました。

翔子は結婚しないし結婚式はないだろうから、これを結婚式だと思おうと思い、本当に派手な祝賀会もやってあげました。私の悲しい気持ちを払う為にやった個展がメディアに取り上げられたんですね。そして多くのお客さんが見えました。そして、皆さんが翔子の作品の前で泣くのでどうしてかと思って、先ほどもお話をしましたが、3つの理由なんですけれども、純度の高い魂ってど

ういうものかと申しますと、翔子は学歴社会からも外れましたし競争心と言うものが全く身に付かなかったんですね。競争心がないという事はこれは素晴らしい人を羨んだり妬んだりする事がないんです。社会の構造が分かりませんので、偉くなりたいとかお金持ちになりたいとも思わないので、世俗に対する欲望が全くないんです。何にも欲望がない無心の心には何が宿ると言う「皆に喜んでもらいたい」という事なんです。社会に属さなかった事によって何にも汚されない全てから開放されている子でして、その翔子がいる世界というのは平和と調和と愛しかないんです。私たちはいつの間にか曇っています、お勉強をしていい成績を取っていい学校に行くと、翔子はそれが無いから全く社会から開放されているが、何か世界の本当の物と繋がっている気がします。戦争や競争や戦いと言うのは多分人間の力が作ってしまった幻想であって、そういうものが身に付かない翔子は本当に平和のうちに生きています。ですから、この世界というのは本当は平和であり調和であるんだなって思えるんですね。また、翔子はいつも恋をしているんですけれども中学入ったら嬉しそうに帰ってきて「お母さん私、高橋君が好きだ」と言っているんですね。翔子は自分が相手を好きであれば相手も同じ度合いで好きだと思っていると思うし、翔子はいつも誰とでもラブラブで、こないだまではマイケルジャクソンと結婚していました。これは私がニューヨークに行って、そっくりさんを頼んでおいたので、一緒に踊ってプロポーズして、OKと結婚していたんですが、今はちょっと違う子を好きになっちゃって、だから「唯心偲」心が決めるという生き方はとても幸せです、全てプラスになっちゃいます。

去年の3月23日に翔子は、ニューヨークの国連本部でダウン症の人たちの代表で日本とアメリカとカナダと中国の30歳のダウン症の代表が集まってスピーチをしたんです。他の国の人たちは先生や親が付き添ったんですが、その時のテーマが「家庭の援護と自立にむけて」でしたから私は翔子を一人ですべて出して出たんですね。そして約10分のスピーチを見事にやって来て、私は涙が止まりませんでした。翔子ができて、病気を告知された日から付けた日記の最初のページに、「今日、私は世界で一番悲しい母親だろう」と書いてあったんです。ところが30年経って、翔子が目の前でスピーチをしていて、翔子が私の目の前で「世界一、幸せだよ」と言われたんですね。ですから、生きてさえいれば絶望はないんだなっていうのが、本当に心から思う事です。『闇の中には光がある』というのを講演の言葉にしたいと思っています。